

各 関 係 機 関 団 体 の 長 } 殿
各 病 害 虫 防 除 員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病害虫防除所)

令和3年度病害虫発生予報第3号(6月)について

このことについて、病害虫発生予報第3号を発表したので送付します。

予報第3号

トビイロウンカの早期飛来に注意!

本年のトビイロウンカ初誘殺は5月10日と前年(5月18日)よりも早く、過去10か年で最も早い誘殺日となりました。また、初誘殺日以降も複数回の飛来が確認されており、今後も気象条件によっては飛来が続くと予想されます。

トビイロウンカは増殖力が高く、発生量が増える前の防除が重要です。定期的にはほ場での発生状況を確認し、必要に応じて防除を行いましょう。



トビイロウンカ成虫



多発圃場の株元



トビイロウンカ被害
(坪枯れ)

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

- 福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス
URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



- Twitter (ツイッター) で定期情報や警報の発出のお知らせを始めました。
Twitterの本アカウント(福岡県農作物病害虫情報)へのアクセス
URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



<予想される向こう1か月の天候（令和3年5月29日～令和3年6月28日）>

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

向こう1か月の降水量と日照時間は、ほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並30 高50% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並見込み

（福岡管区気象台 令和3年5月27日発表抜粋）

6月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	6月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 ミカンハダニ	並 少	並 やや少	並 並
なし	黒星病 ハダニ類	並 並	並 並	並 並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少 やや少 やや多	並 やや少 並	並 並 並
果樹共通	果樹カメムシ類	—	少*（前年比）	
茶	炭疽病 もち病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノキイロアザミウマ チャトゲコナジラミ チャノミドリヒメヨコバイ	並 少 やや少 並 少 並 やや多	並 少 やや少 並 やや少 並 やや多	並 並 少 並 やや少 やや少 やや少

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

*果樹共通・チャバネアオカメムシの予報は前年比としている

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

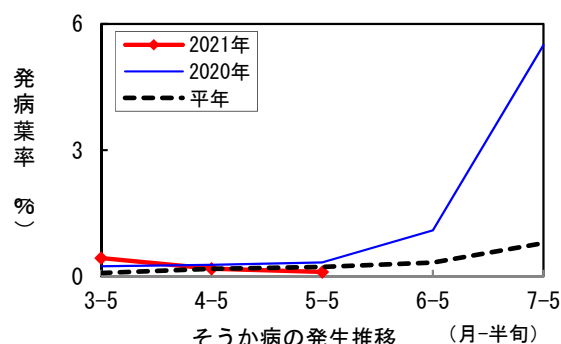
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉率 0.1%（平年 0.2%、前年 0.3%）

発生ほ場率 20.0%（平年 13.3%、前年 30.0%）



イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉は園外に持ち出し、幼果期の防除を徹底する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。

2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発生葉率 0.9% (平年 7.0%、前年 2.2%)

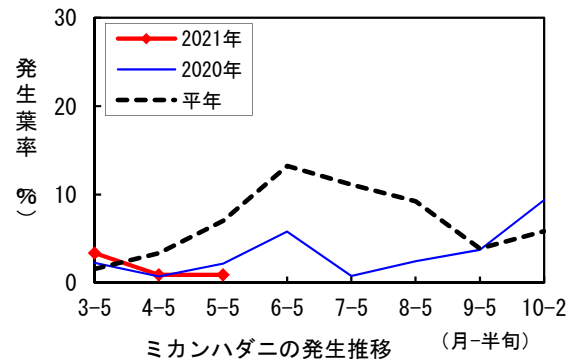
発生ほ場率 9.1% (平年 45.8%、前年 27.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

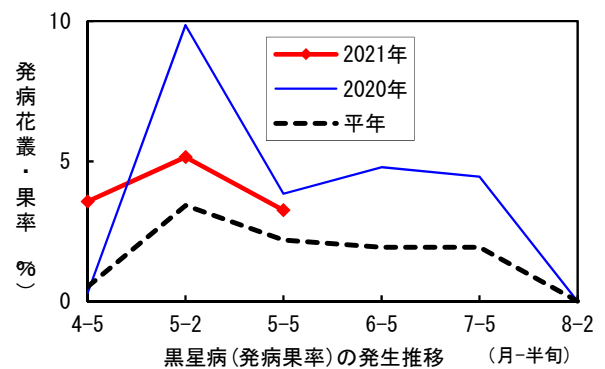
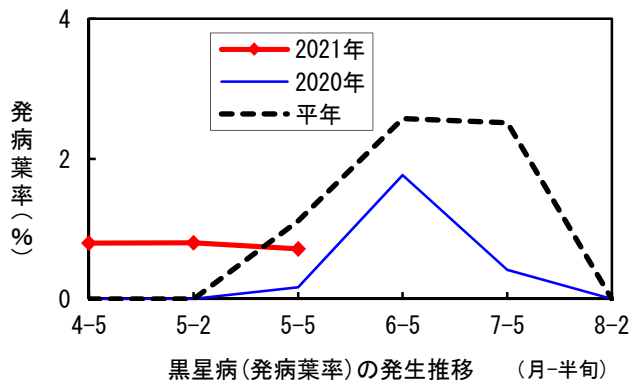
発病葉率 0.7% (平年 1.1%、前年 0.2%)

発生ほ場率 54.5% (平年 56.5%、前年 30.0%)

発病果率 3.3% (平年 2.2%、前年 3.8%)

発生ほ場率 36.4% (平年 53.8%、前年 40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP (アピリピリジン) 剤については同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。

これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。

エ 「幸水」の果実は開花60日後以降、再び感染しやすくなるため、果実への感染防止に努める。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生葉率 0.05% (平年 0.3%、前年 0.2%)

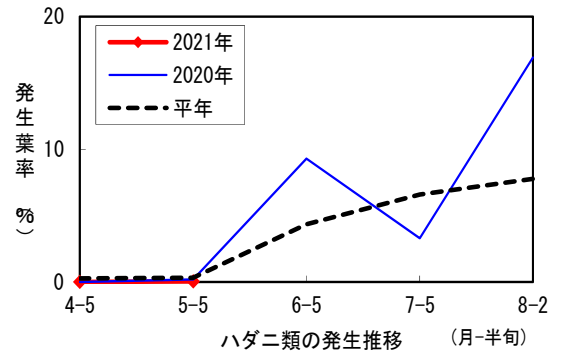
発生ほ場率 9.1% (平年 12.8%、前年 20.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

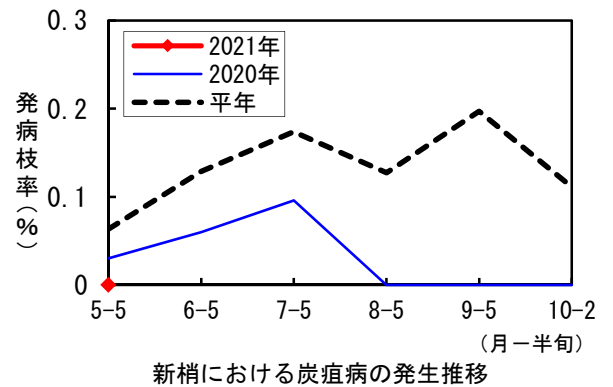
発病枝率 0% (平年 0.06%、前年 0.03%)

発生ほ場率 0% (平年 10.8%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

発生枝率 0.6% (平年 1.3%、前年 0.1%)

発生ほ場率 18.2% (平年 40.0%、前年 9.1%)

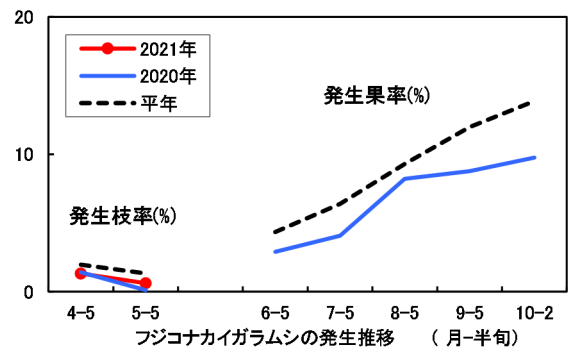
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹上での第1世代幼虫の孵化時期を確認し、約10日間隔で2回防除を実施する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。

ウ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。



3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるチャノコカクモンハマキとチャハマキの誘殺雄成虫数はやや多かった（±～+）。

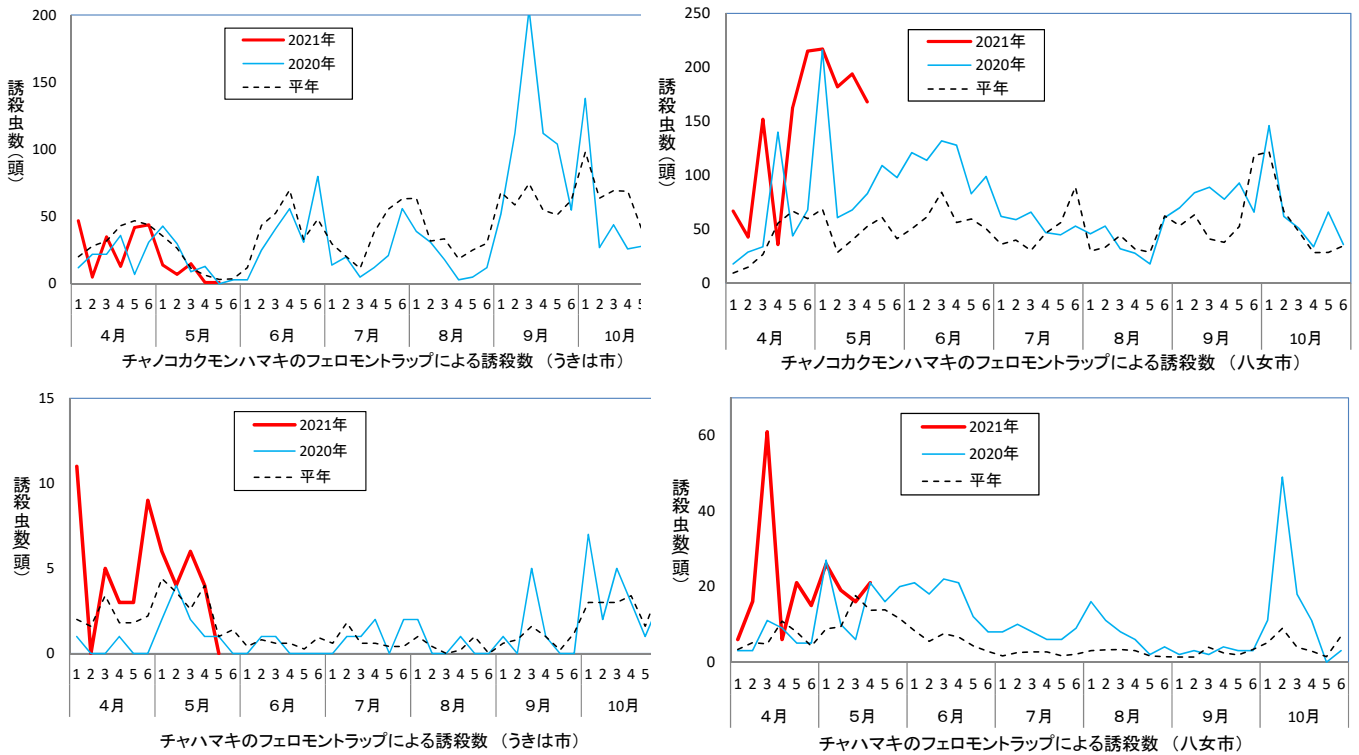
誘殺数	チャノコカクモンハマキ	くきは市	223頭	(平年 294頭、前年 225頭)
		八女市	1,437頭	(平年 425頭、前年 761頭)
	チャハマキ	くきは市	51頭	(平年 27頭、前年 11頭)
		八女市	207頭	(平年 86頭、前年 100頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノコカクモンハマキとチャハマキの第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃であるが、ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



【果樹共通：果樹カメムシ類】

(1) 予報の内容

発生量：前年より少

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は前年より少なく（-）、越冬成虫数が同程度であった2016年よりもやや少なかった。

誘殺数	＜宗像市＞	6頭	(前年 1頭、2019年 6頭、2016年 4頭)
	＜筑紫野市＞	22頭	(前年 1,208頭、2019年 36頭、2016年 210頭)
	＜くきは市＞	196頭	(前年 538頭、2019年 0頭、2016年 60頭)
	＜八女市＞	5頭	(前年 10頭、2019年 1頭、2016年 33頭)

イ 4月1半旬～5月4半旬までの予察灯による成虫誘殺虫数は前年より少なく（－）、2016年並であった。

誘殺数 <飯塚市> 0頭（前年 10頭、2019年 8頭、2016年 9頭）
 <筑紫野市> 94頭（前年 673頭、2019年 48頭、2016年 0頭）
 <朝倉市> 7頭（前年 111頭、2019年 4頭、2016年 9頭）
 <久留米市> 3頭（前年 289頭、2019年 16頭、2016年 0頭）
 <うきは市> 13頭（前年 21頭、2019年 1頭、2016年 10頭）
 <八女市> 75頭（前年 3,051頭、2019年 280頭、2016年 226頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

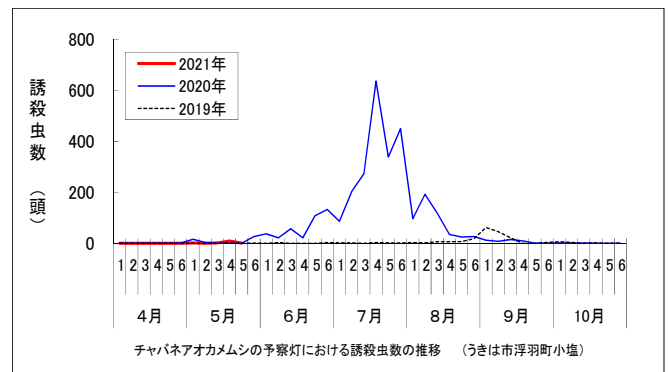
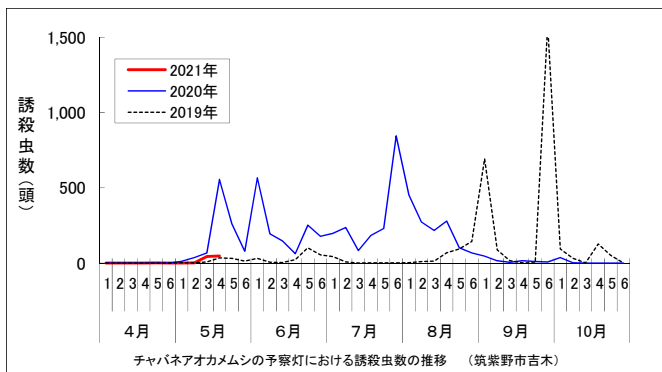
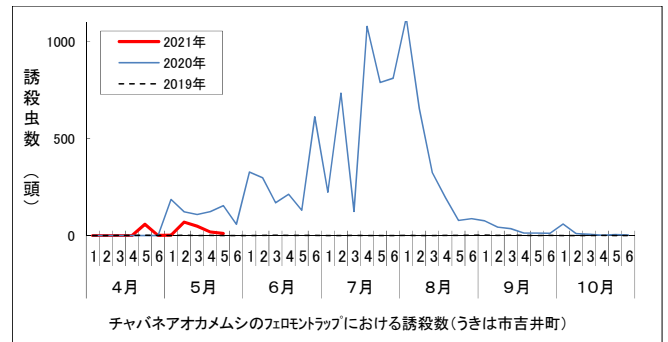
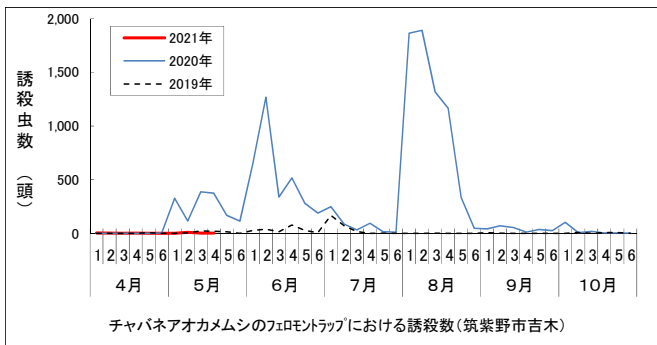
(3) 防除上注意すべき事項

ア 夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と地域の予察灯やフェロモントラップの誘殺状況を確認する。

イ モモ、スモモ、ウメ、ナシ等への飛来や被害の発生状況は、地域や同一園内でも偏りがあるため、園内全体を注意して見回り発生に応じて防除を行う。

防除後、降雨があると薬剤の残効が短くなるので注意する。

ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<https://www.jpnp.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。



【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

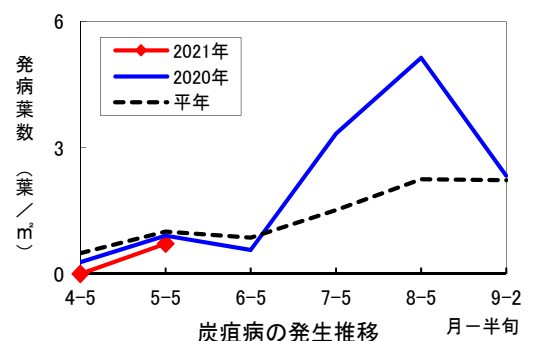
(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉数 0.7葉（平年 1.0葉、前年 0.9葉）

発病は場率 28.6%（平年 47.4%、前年 71.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上の注意

ア 雨滴により孢子が飛散伝搬するため降雨が多い6～9月に発生が増加するので、防除は降雨前日までに実施する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、適切に実施する。

2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

発病葉数 0葉 (平年 0.6葉、前年 0葉)

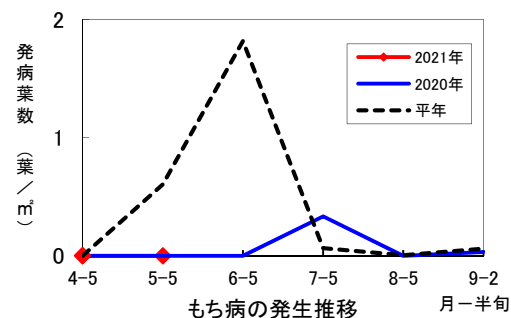
発病ほ場率 0% (平年 13.2%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 6～7月に降雨が多く、多湿の場合に発病しやすい。

摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽期に他の病害虫との同時防除をおこなう。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

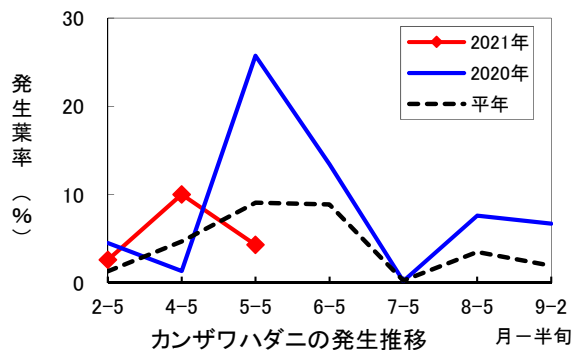
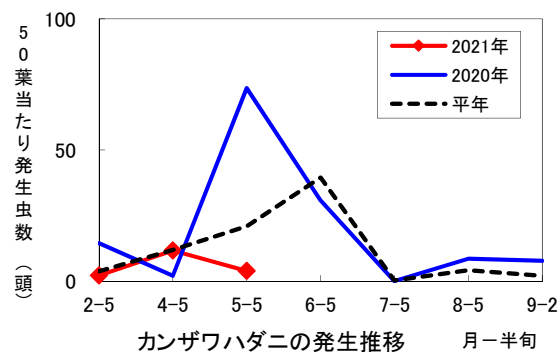
ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－～±)。

50葉当たり虫数 4.0頭 (平年 21.0頭、前年 73.6頭)

発生葉率 4.3% (平年 9.1%、前年 25.7%)

発生ほ場率 42.9% (平年 51.6%、前年 100%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上の注意

ア 6月上～中旬まで発生量が増加するので、発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の場合は、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、平年よりやや多かった(±～+)。

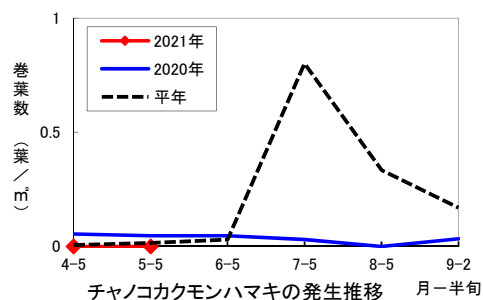
誘殺数 <うきは市> 223頭 (平年 294頭、前年 225頭)

<八女市> 1.437頭 (平年 425頭、前年 761頭)

イ 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

1㎡当たり巻葉数 0葉 (平年 0.01葉、前年 0.05葉)

発生ほ場率 0% (平年 4.4%、前年 14.3%)



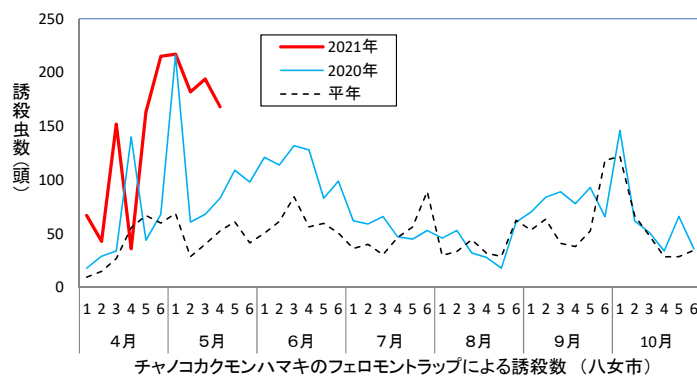
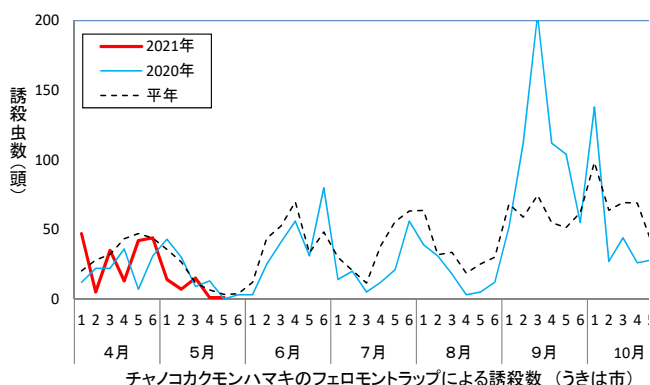
ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）

(3) 防除上の注意

ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃である。

ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら、直ちに防除を行う。



5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

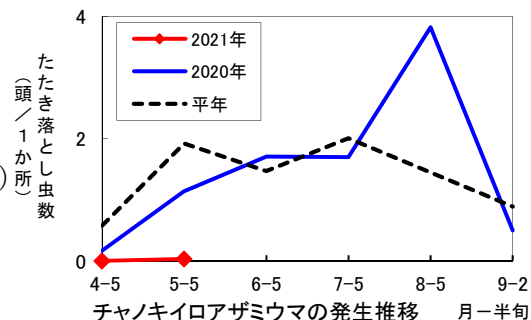
たたき落とし虫数 0.04頭（平年 1.9頭、前年 1.1頭）

発生ほ場率 14.3%（平年 61.2%、前年 42.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 発生量は5月中旬から増加し、6～7月に最も多くなるので、B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



6 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量： 平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発生葉率 2.0%（平年 2.3%、前年 4.3%）

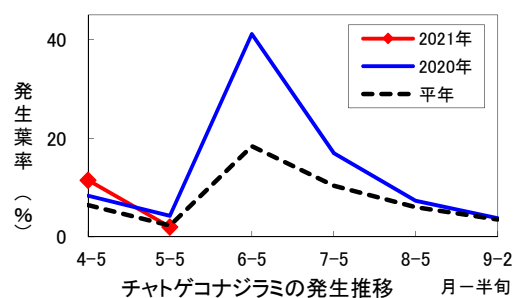
発生ほ場率 42.9%（平年 26.6%、前年 85.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は若齢幼虫発生期で、第一世代幼虫の防除適期は、山間地では5月下旬～6月上旬頃（平坦～中山間地では5月中～下旬頃）であるため、成虫の発生状況をよく観察し発生がほとんど見られなくなった頃から、他の病害虫との同時防除を徹底する。

イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。



7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 4月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

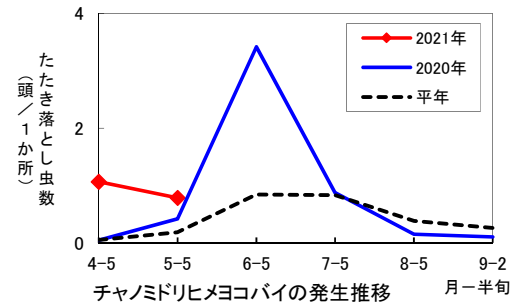
たたき落とし虫数 0.8頭(平年 0.2頭、前年 0.4頭)

発生ほ場率 57.1%(平年 31.1%、前年 71.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 二番茶期の発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬を使用する機会が増える6月から8月を農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、「令和3年度 農薬安全使用運動」期間と定め、農薬の適正使用と危害防止について情報発信を実施する等、関係機関、団体と一体となって取り組みを強化しています。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律(廃掃法)』で禁止されているので、絶対に行わない。